

イチゴ品種‘奈乃華’の栽培に適した株間と芽数

～収量向上に向けて～

当センターで育成したイチゴ品種‘奈乃華’の収量向上を目指して、定植時の株間と栽培中の芽数管理を検討しました。慣行より株間を狭くする、または、芽数を多く管理することで収量が向上することが明らかになりました。

1. 背景と目的

当センターで育成した‘奈乃華’は、春先のイチゴ栽培でしばしば問題となる果実の軟化と食味低下が起こりにくいことから、栽培面積が拡大しています。しかし、収量がやや低いという欠点があり、収量向上技術の開発が求められています。‘奈乃華’の草姿は県内で普及している他の品種より小型であるため、慣行の栽培方法では株間に隙間がしやすいという特徴があります。そこで、狭い株間で定植することや栽培中の芽数を多く管理することにより、収量の向上が可能だと考えて実験を行いました。

2. 研究成果の概要

センター内の土耕栽培ハウスを用い試験を行いました。18cm株間で定植し1芽管理を行う株間18cm区、23cm株間で定植し2芽管理を行う2芽管理区、23cm株間で定植し1芽管理を行う慣行区を設けました。いずれの区においても、果実数は7果/果房、葉数は7枚/芽を基準に管理し、果実の収量と品質を調査しました。

定植時の株間を18cmとした場合には、慣行と比較して12月下旬から1月上旬の収量が多く推移しました(図1)。糖度と酸度は慣行と同等の水準を維持できており(表1)、クリスマス頃に収量が増えることは利点と考えています。

一方、芽数管理を2芽とした場合には、慣行と比較して1月下旬から2月中旬の収量が多く推移しました。糖度と酸度は慣行と同等の水準を維持できていました。慣行の栽培方法では2月上旬の収量は1月下旬と比較して64%減で

あったのが、2芽管理では48%減と、厳冬期の収量の落ち込みが緩和されたことは、特筆すべき効果と考えています。

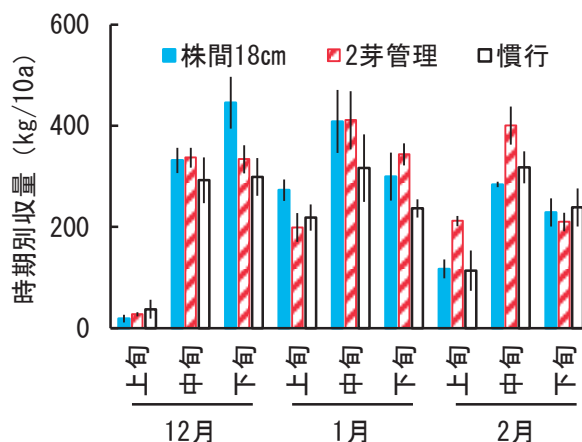


図1 株間と芽数が‘奈乃華’の2023年から2024年の時期別収量に及ぼす影響
縦棒は標準誤差を示す

表1 株間と芽数が‘奈乃華’の果実の糖度と酸度に及ぼす影響

栽培方法	糖度 (%)		酸度 (%)	
	12/25 ²	2/26	12/25	2/26
株間18cm	10.9	9.9	0.55	0.47
2芽管理	10.8	10.5	0.56	0.49
慣行	11.3	10.2	0.54	0.47

²調査日(月/日)

3. 実用化に向けた対応

定植時の株間を狭くすることや、栽培中の芽数を多く管理することにより、品質を落とさずに‘奈乃華’の収量向上が可能であることを確認しました。年内収量の確保を重視する場合には18cm株間での定植が、厳冬期の収量低下回避を重視する場合には2芽管理がそれぞれ有効でした。

(栽培・流通科 佐野太郎)